

INDEPENDANTS

INDEPENDANTS

夜のユースセンター

実践報告書

夜のユースセンター
運営 松崎涼平センター



仁科がとぎす時間
中学生から30代までの若者の場所
ちょっと探してみませんか?

← INDEPENDANTS内

WELCOME

BUSINESS HOURS

MONDAY	12:00 - 20:00
TUESDAY	12:00 - 20:00
WEDNESDAY	12:00 - 20:00
THURSDAY	12:00 - 20:00
FRIDAY	12:00 - 20:00
SATURDAY	12:00 - 20:00
SUNDAY	12:00 - 20:00

誰かと話したい夜、
 独りになりたくない夜、
 とっておきの時間を過ごしたい夜。
 ときどき帰れる、まちの家があったら。
 そんな思いから
 「夜のユースセンター」は誕生した。
 若者が夜の時間にふらっと立ち寄り、
 ふらっと帰る、
 目的がなくても集い、
 共に過ごせる場。

なぜ、夜の時間帯にユースセンター、若者のための場所が必要なのか。
 事業展開にあたって必ず聞かれる質問である。
 言葉を選ばなければ、きまってるように答えている。
 「え、だって若者のための安心・安全な場所が24時間やってたらよくない? でしょ?」、と。

私たちが京都市より受託し、京都市内7ヶ所で運営する青少年活動センターは、中学生年代から30歳までの“すべて”の若者を対象とする、平日は10時から21時、日曜祝日は18時までやっている、若者が目的を問われずいることのできる居場所である。
 放課後・仕事終わりに友達と雑談する、自習する、サークル活動をするなど、来館する若者の目的は多様である。
 目的なく、なんとなく来館する若者も多い。
 常駐する若者と関わる専門スタッフ、ユースワーカーとの雑談から、家族・人間関係などの相談が生まれることもあれば、「~したい!」からチャレンジが実現することもある。

しかしながら、私たちが若者と関わるができるのは、青少年活動センター開館中であり、閉館後はその埠外である。
 閉館後のニーズは高く、家庭環境などの理由から、閉館以降に、家にいたくない、食事が無い、泊まる場所がないなどの相談をうけている。

新型コロナウイルス感染拡大が、家庭養育の時間を増大させ、若者にひずみが生じている、ともいえるが、多くはコロナ以前から接するリアルであり、潜在的な事象が表層化しただけ、だと“現場感覚”では捉えている。
 皮肉なことに、新型コロナウイルス感染拡大によって、若者×居場所が社会問題化され、予算化されるとともに、青少年活動センターが休館したことによって、本事業はエビデンスを得て、生まれることができたのである。

ユースセンターは青少年活動センターの英訳であり、つまり、青少年活動センターがやっていない時間帯でのその機能の展開、これこそ夜のユースセンターでやったことである。

一時保護、シェルターなど支援機関が展開する活動の多くは、問題が顕在化した若者が対象であり、それ以外の若者は対象ではない。
 問題あるなしに関係なく、“すべて”の若者がふらっと訪れ、安心安全に過ごすことのできる夜の場をひらくこと、支援機関ではない、私たちだからこそできたと自負している。

できたことあれば、できなかったこともある。本報告書から活動の一端に触れて頂き、「若者のための場所、(当たり前)に必要だよな!」と少しでも多くの方に共感頂ければ幸いです。



Contents

- 03 はじめに (経緯)
- 04 夜のユースセンターの概要
- 06 INDÉPENDANTS for youth
- 08 同時代セカンドハウス
- 10 鴨川リサーチ/ネットワークの構築
- 12 調査・研究
- 16 夜のユースセンターで生まれたもの
- 17 夜のユースセンターを運営すること
- 18 おわりに



夜のユースセンターの概要

コロナ禍 2年目の夏、居場所を失った若者への緊急支援として本事業はスタートした。
緊急事態宣言の発出に伴い、若者が利用できる拠点は休館や開館時間の短縮、事業の制限を強いられた。
行政サービスとしての青少年活動センターも例外ではない。
若者からは「家に帰りたくない」「食事が無い」「アルバイトがなくなり生活が厳しい」といった声が聞こえていた。

多くの若者が長期休暇期間にあたる 8月から9月を試行期間として位置づけ、INDÉPENDANTS（京都市中京区三条通り御幸町東入
弁慶石町 56 1928 ビル B1F）を拠点に『夜の若者食堂』を実施。

誰もが来られるオープンアクセスの場として開放し、無料で食事を提供するほか、ボードゲームやカードゲームなど遊べるコンテンツも充実
させていった。

利用する若者たちへのヒアリングや街中での声掛け（夜回り）による実態調査から若者のニーズを把握し、本格実施に向けて歩みを進めた。

試行的に展開していた「夜のユースセンター」は若者たちからの声に後押しされ、10月からも継続実施となる。

11月にはまちなかの一軒家を貸し切り、新たな拠点をオープンした。

共に過ごせるだけでなく、他の支援機関と連携し、一時的な宿泊や金銭的援助を可能とする支援拠点としても機能することを目指した。

INDÉPENDANTS for youth

8月～9月 毎週火曜日 18:00~23:00

10月～3月 毎月第3火曜日 18:00~23:00

@INDÉPENDANTS（三条御幸町）

三条通り御幸町にある INDÉPENDANTS よりワンプレートを用意いただき、
若者へ無料で提供した。本事業の足掛かり的な事業。



調査・研究

夜の時間帯における若者のニーズの把握や実際に若者がどのように
夜のユースセンターで過ごしていたのかについて調査・研究した。
調査協力：Yofukashi*



同時代セカンドハウス※12月～

毎月火曜日 18:00~翌朝 5:00 頃 通常は 23:00

@ 同時代ギャラリー GARAGE/Residence

泊まれる夜のユースセンターを目指して、京都市南区にある一軒家を
拠点に「同時代セカンドハウス」をオープン。



Wakashoku.com（フードチケット）※3月～

鴨川リサーチ（夜回り）※10月～

それぞれの事業で「センターに来ることが出来ない／来ていないまちなかの若者」
を対象にして、ユースセンターの展開可能性を模索した。



ネットワーク形成（連携会議）

夜のユースセンターが若者にとって意義のある場となるために、
ノウハウや広報、ニーズの焦点化など、京都市域の関係団体からの
知見や助言を得る場を設けた。



INDÉPENDANTS for youth

期間 8月3日(火)～3月22日(火)

場所 INDÉPENDANTS
京都市中京区三条通り御幸町
東入弁慶石町 56 1928 ビル
B1F

利用者数(延べ) 331名 ※3月末日まで

各回平均人数 22.0名 ※3月末日まで

利用者層 中学生、高校生、大学生、
フリーター、社会人

2021年8月～9月の毎週火曜日(18時～23時)、2021年10月～2022年3月の第3火曜日(18時～23時)に実施。当初は『夜の若者食堂』やロビー機能を中心に展開していた。食事はINDÉPENDANTSよりワンプレートを用意いただき、若者へ無料で提供した。

オープン直後の8月は会場(INDÉPENDANTS)内3テーブルのみを使っての実施となり、利用者数も10名程度と非常に小規模な場であった。青少年活動センターのユーザーを中心に顔なじみの若者たちが集まって食事や談笑をして過ごしていた。

8月下旬より会場全体を貸し切り、知人や施設の紹介によって新たな顔ぶれも加わり、試行期間の終わりを迎える9月末日には、利用者数が30名ほどにまで増加した。自習や談笑、ボードゲームやカードゲーム、スクリーンを使ったゲーム大会など、過ごし方も多様になっていた。提供食数の増加や食事のみで帰宅する若者が一定数見受けられたことから、訪れる若者た

ちにとって食事提供の有無が重要な要素となっていたように伺える。

緊急事態宣言が明け自粛生活が緩和した10月からは月1回の継続実施とし、10月以降の各回の利用者数は30名～40名にも上る。若者から声があり、自主企画やワークショップを実施することもあった。企画に参加する若者、一人で食事や自習をして過ごす若者、集まってゲームをする若者、一つの空間で様々な過ごし方が展開されていた。

会場内にはフードパントリーを設置し、乾麺や即席スープ、パン、菓子類等を無料配布した。各回で用意していた数十点が大方なくなるほどの盛況ぶりであった。特に乾麺やご飯ものなど、手軽に調理ができ主食になり得る商品が人気のようだ。

若者食堂、フードパントリーのほか、INDÉPENDANTSの協力を得てフードチケットを配布した。フードチケットとは、「夜のユースセンター」開催日以外にも、INDÉPENDANTSにて無料で食事ができるチケットである。「夜のユースセンター」や青少年活動センターの利用者へ配布した。

「夜のユースセンター」のみで関係を完結させる若者もいれば、枠を超えて関係を保持している若者もいる。様々な人の出会い・交流が生まれ、共感や刺激を与え合う空間が構築されていく反面、過ごし方や関係性に悩む若者の姿もあった。

一度のみの利用があったり、継続利用があったりと、オープンアクセスらしい流動性が感じられつつも、その中で巻き起こる事象に対し、それぞれの場の捉え方が思考されていたように見える。

3月22日の最終日は31名の若者が利用し、最後まで賑わいを見せていた。

私自身、長年飲食業に携わって来ていつか子供食堂をやりたいと考えておりましたので、「若者食堂」のお話しは大変興味がありました。実際にスタートした時はコロナ禍も重なり、皆が来てくれるのか多少不安でもありましたが8カ月間なんとか無事に開催する事が出来ました。アンデパンダンのメンバーにとっても良い勉強の機会を与えて頂きました事を心より感謝致しております。

初めの頃は多少の緊張感があったと思いますが、回を重ねるうちに何度も来てくれる子達とも顔見知りになり後半は食事やゲームを楽しんでくれる姿にこちらもとても嬉しく感じました。

みんな敬語で話しをしてくれ、ちゃんとお礼を言ってくれる良い子達でした。出来ればこれからも何らかの形で継続して頂きたいと思える取り組みでした。

色々な事情を抱えている子供たちに親身になって見守ってられるユースサービス協会のスタッフの皆様には本当に頭が下がります。

皆様に救われている子供たちがいっぱいおられますね。

この活動がもっと世間にも浸透し皆で子供という財産を守っていきける世の中になって欲しいと願っております。

「食をたのしむ」という時間を少しでもみんなが感じてくれていれば幸いです。



協力者

INDÉPENDANTS マネージャー
宮本 千夏様

Switch やボードゲームなど
色々出来た



初対面の人たちとも
楽しくゲームをして過ごせた

ビブリオバトル開催できた

色々な人の生き方を
知ることができた



新たな知り合いを作れて
その人たちと遊んだり
話したりできた



同時代セカンドハウス

期間 11月9日～3月27日

場所 同時代ギャラリー GARAGE
京都市南区東九条北松ノ木町
7-1

利用者数(延べ) 145名 ※3月末日まで

各回平均人数 10.3名 ※3月末日まで

利用者層 中学生、高校生、大学生、
フリーター、社会人

泊まれる夜のユースセンターを目指して、京都市南区にある一軒家を拠点に「同時代セカンドハウス」をオープン。

初回は『夜の作戦会議』と題し、若者たちと共に一軒家を内覧しながら、どのような使い方ができそうか、どのようなコンテンツがあると過ごしやすいか、アイデアを出し合った。「ハンモックを置きたい」「音楽や映像を流したい」「芝生を敷いて裸足で上がれるようにしたい」「みんなで鍋パーティーやたこ焼きパーティー、BBQがしたい」とユニークな意見があがっていた。

作戦会議を経て、看板づくりや備品の搬入等、同時代セカンドハウスの本格開催に向けた準備が進められた。

「夜のユースセンター」としては、1階と2階の2か所を開放している。1階は展示会用のギャラリーとなっており、白壁に覆われたまっさらな空間である。キャンプ用品やストーブを設置し、

食事や談笑ができるスペースを確保した。

2階はダイニング、リビング、寝室に分かれ、まさに“家”のような造りとなっている。冬には炬燵を出し、くつろげる場として活用した。若者たちは1階と2階を行き来し、各々の場所で思い思いに過ごしていた。

同時代セカンドハウスにおいては、INDÉPENDANTSのような食事提供がない。当初は、デリバリーサービスを活用して食事をとっていたが、みんなで作る方向へとシフトしていった。たこ焼き、お好み焼き、焼きそば、焼肉、餃子等、鉄板焼きメニューの他、年始にはお雑煮やお餅を用意し、季節に合わせた食事を楽しんだ。

期間中、宿泊型で『夜の過ごし方実験会』を開催した(全2回)。通常の「夜のユースセンター」が終了した23時以降、希望者を対象に朝まで過ごせる場として開放し、運用に向けた意見を募ることが目的である。入浴は同時代セカンドハウスの浴場、または近隣の大衆浴場(銭湯)を使用し、寝具やアメニティを貸し出した。就寝する若者ももちろんいたが、多くは朝まで起きていた。

11月～12月は概ね10名前後の若者が利用に訪れていたが、年末年始には20名ほどになっていた。INDÉPENDANTS for youthと同時代セカンドハウスの2拠点を利用する若者、INDÉPENDANTS for youthのみを利用する若者に二分されていたように見える。同時代セカンドハウスのみを利用する若者はいなかった。

若者たちの過ごし方に大差はないものの、同時代セカンドハウスにおいては「家」「家族」のような空間が形成されていた。密接な関係を心地良いとする者、そうでない者、ここでもそれぞれの価値観が混在し、ぶつかり合いながら場がつけられていった。

わたしは夜のユースセンターに利用会場として同時代 GARAGE (私の実家) を貸し出しました。きっかけは、この事業の統括をしていた天下さんとわたしが旧来の仲で、そのご縁を生かしてもらったことです。

しばらくの間、空き家となっていた場所が若者のための場として、週に1回利用してもらうことで、若者たちや職員さんたちがみんなで食事をつくったり、語り合ったりしている姿をみて、なぜかとても安心感を感じています。

わたしとしては、若者の場としてこの場を貸し出してみたものの、最初はこの場が若者にとって、どんな場所になるだろうと不安もありましたが、日を追うごとに若者が楽しそうにこの場を使ってくれている様子を見ることが出来るようになりました。顔ぶれも慣れてきたところで、わたし自身もまた夜のユースセンターの若者とかかわる機会があつて嬉しかったです。

また、最後にはわたしが関わっている若いアーティストさんと夜のユースセンターを利用している若者がコラボしてワークショップやお披露目会もできてとてもよかったです。

今後もこうした活動が継続的に続いていくことを願っています。



協力者

(株) 同時代
高 尚 赫 様



色んな人と出会える!!
話せる!!楽しい!



関係が広まった!!

ご飯を温かい雰囲気
で食べられる



いろんな人と会うことができ
価値観がより良く変わった

自分の夢を
聞いてもらえた



鴨川リサーチ

実施日時 10月15日(金)
22時~23時30分

11月23日(火)
0時~3時30分

1月17日(月)
22時~24時

鴨川リサーチは「オープンアクセスの場に来ることのできる若者って限られていない?」という疑問からはじまった。コンセプトは「ユースワーカーがまちなかの若者に会いに行く。」にして実施した。

鴨川リサーチではいわゆる繁華街域と呼ばれる区域とその周辺をユースワーカーが巡回した。具体的には、祇園通りや木屋町通り、三条河原町、四条河原町などの通りを巡回していた。終電が終わる前後の時間にまちなかで若者は何をして過ごしているのか。そこで、若者はどのような欲求や願いをもっていて、どんな不利や困難を抱えているのか。終電を逃した若者はまちなかでどのように時間をすごしているのか。

私たちは夜のまちなかにもまた新たなユースセンターのユーザーは確かにいると信じて夜のまちなかを巡回した。

実際に、夜のまちなかには集団で花火をしている若者のグループ、鴨川の河川敷でゆったり話している若者の2人組、道中でカップラーメンを食べている若者のグループ、駅に向かって急ぎ足で歩く若者、誰かを待っている若者、木の下でお酒を飲んでいる若者、ファストフードのお店で眠る若者、寒空の下、ビルとビルのすき間でコンビニのご飯を食べる若者、閉店後のお店の前で倒れている若者、などがいた。ユースセンターで待っているだけでは出会えない若者の姿をみる事ができた。

※本事業はあくまで深夜の時間帯にユースワーカーが夜のまちなかへの巡回を実施したのみであり、実際に若者にチラシを配布するなどの行為はしていない。



鴨川リサーチの巡回マップ



ネットワークの形成 (連携会議)

- 連携会議 特定非営利活動法人
山科醍醐こどものひろば
- 特定非営利活動法人
こどもソーシャルワークセンター
- 特定非営利活動法人
happiness
- 特定非営利活動法人
コミュニティ・スペース sacula

事業を進めていくうえで、ノウハウや広報、ニーズの焦点化など、京都市域の関係団体からの知見や助言を得て、当該事業が若者にとって意義のある場となるための意見交換を重ねてきた。

地域に根ざした子どもの居場所づくりやコミュニティスペース運営をしているNPO、若年女性支援団体など、コロナ禍の影響を肌で感じ現場で奮闘する団体の代表者から、夜のニーズへの応答に対して共感を得られたことは、大きな後ろ盾となった。謝意を込めて連携会議に参加いただいた団体名を掲載する。

他機関連携にはもう一つのねらいがあった。

<社会実験>として進めるうえで、他団体とも連携しながら京都市域における若者の場づくりを進めていく機運醸成だ。

「夜のユースセンター」…その響きに共感する大人や事業者にも出会うことができた。

会場提供をいただいたカフェはもとより、定時制高校の教員、ぐ犯少年のサポートにあたっている支援者、保護司、児童養護施設等職員、大学教員、空き家活用の事業者、ライター、コミュニティカフェのオーナー、フードバンク団体など、これまでに夜の個別ニーズに応答してきた方々や場をつくりたい・必要だと考える事業者らとの出会いは確かな手ごたえとして、今後の事業展開への布石となった。



ちょうど1年ほど前の昼下がり。

週に1度のカフェに集まったウダウダのメンバーが、ウダウダと常駐の居場所があったらいいなあと話を始め、おばちゃんたちも「みんなで一緒に晩ごはんが食べたい」と言い出した。じゃあ作ったらええやん!と休眠預金に応募したのが「わかさリビング」誕生の経緯。

ある日、ユースサービス協会さんから「一緒に報告会しませんか」とお声が掛かり、それクジラとちりめんじゃこくらい立場が違うじゃないですかーと言いながら、会ってみたら同じ方向を見ていることに気づき、熱い思いに共感し、あっという間に同志になった。そこからメンバー同士の交流が始まった。

彼女たちはミツバチのごとく、両方の居場所をせせせと行き来し、さまざまな気づきやアイデアを運んでくれ、それが層の厚さになっていく。一方で少女たちは、信頼できる関係性と生命線である食料が手に入る、一粒で二度美味しい構図。少女支援はひとりではできない。正解なんてない。だから、いろんな関係性のなかで、少女の育ちを応援することが大切。連携することで、ずっとずっと大きな資源になる。

わかさリビングは、いつもおいしいご飯がある。それとチャレンジを忘れない。たぶん、そこが意気投合の理由なのだろうな。



協力者
一般社団法人京都わかさねっと
事務局長
北川 美里様

本事業は夜の時間帯における若者のニーズを把握することを目的に実施された。

そこで、わたしたちは

- ①京都市および関西近郊に在住する若者を対象とした「若者の夜の過ごし方に関するアンケート」調査、
 - ②夜のユースセンターへのユーザーアンケート、
 - ③夜のユースセンターへのヒアリング調査も実施した。
- ここでは、これらの調査の結果を紹介し、若者の夜の時間帯のニーズを把握し、私たちの「夜のユースセンター」という実践がもっていた機能やその意義を考察する。

I. 夜の時間帯における若者のニーズの把握編

まず、①京都市および関西近郊に在住する若者を対象とした「若者の夜の過ごし方に関するアンケート」調査の結果を紹介する。現代の若者の夜の時間帯の過ごし方から彼らのニーズを浮き彫りにする。

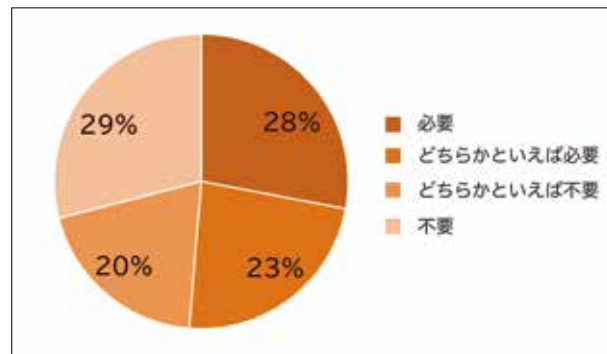
調査概要

調査期間	2021年11月中旬～12月中
調査対象者	京都市内および関西近郊の若者(15歳～30歳)
回答数	583件

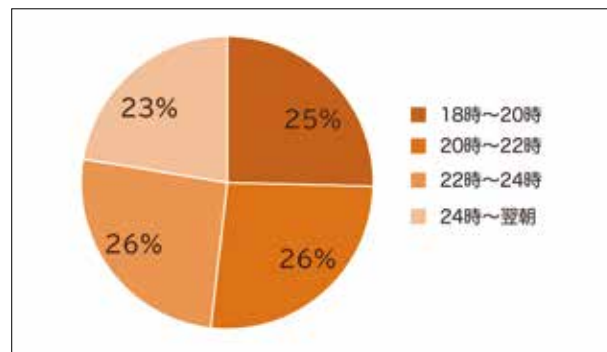
※また、本調査はYofukashi*が京都精華大学にて実施した「居場所に求めるアンケート」を参考にして設問の回答項目等を作成した。

約半数の若者が夜の時間帯における自宅以外の居場所の必要性を感じている!

グラフ① 夜の時間帯に居場所が必要かどうか (N = 579)



グラフ② 夜の居場所が必要な時間 (N = 807) ※複数回答可

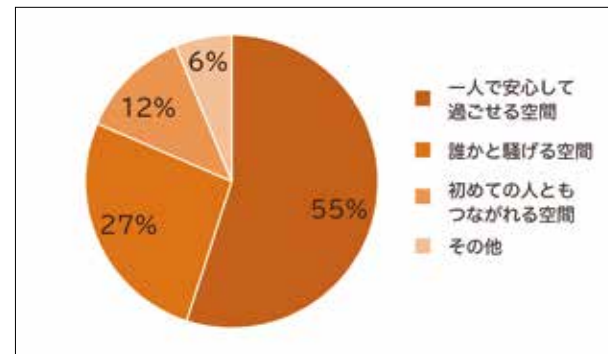


メモ

同調査の回答者となった若者の傾向として、18時～23時では77%の若者が自宅を居場所と認識しており、23時～翌5時では98%の若者が自宅を居場所と認識している!しかし、同調査の半数以上の若者の若者が自宅「以外」の居場所を必要としている。

半数以上の若者は「一人で安心して過ごせる空間」としての居場所を求めている!

グラフ③ 夜の居場所に求めるもの (N = 782) ※複数回答可



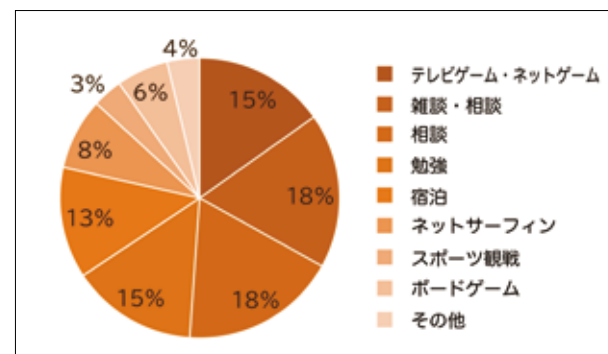
メモ

101件は「一人で安心して過ごせる空間」と「誰かと騒げる空間」をどちらも選択しており、ゆっくりしたいときもあれば、コミュニケーションを楽しみたいときもあるなど、場を希望する者のニーズが可変的である!

また、「その他」では「誰かと静かさや騒がしさは関係なしにしていることができる空間」、「勉強できる空間」や「不安なときに相談できること」、「雨がしのげて暖かい空間、一晩しのぎのシェルターとして準備されている場所」という回答があった。

夜の居場所ですしたいことは、「雑談」、「食事」、「テレビゲーム・ネットゲーム」、「勉強」!

グラフ④ 夜の居場所ですしたいこと (N = 1672) ※複数回答可

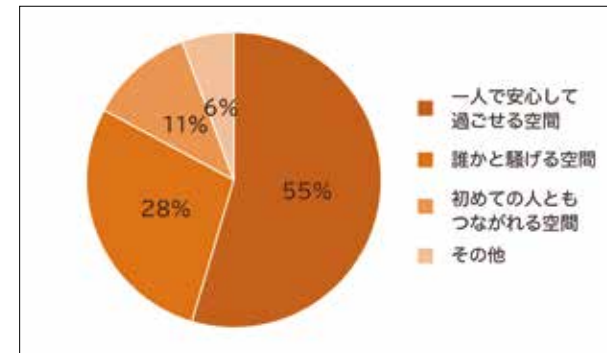


メモ

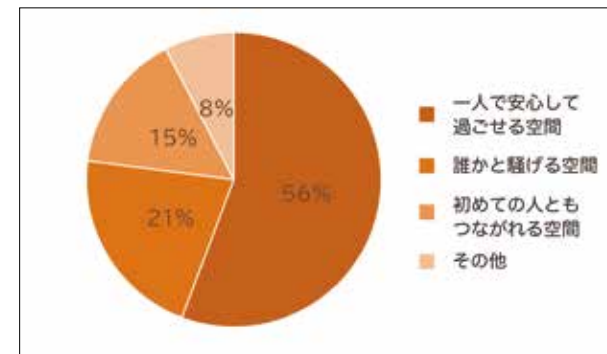
「その他」の回答欄には、「制作物」「映画鑑賞」「スポーツ」という回答に加え、「風呂」「睡眠」という回答が認められた。

生活環境の違いによるニーズの違い

グラフ⑤ 家族ほか同居の場合の夜の居場所に求めるもの (N = 577) ※複数回答可



グラフ⑥ 一人暮らしの場合の夜の居場所に求めるもの (N = 183) ※複数回答可

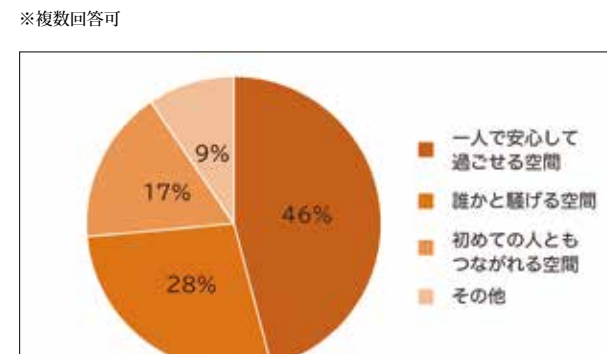


メモ

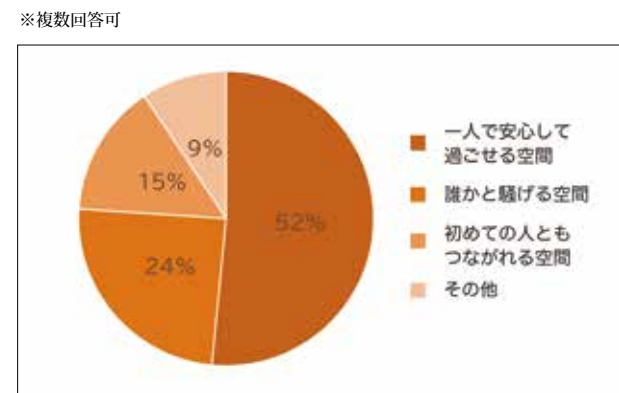
一人暮らしの若者は家族ほか同居している若者に比べて「新しいつながり」を求めている人が多い。

夜の居場所の開放時間の違いによるニーズの違い

グラフ⑦ 18時～22時の居場所に求めるもの (N = 231) ※複数回答可



グラフ⑧ 22時～翌朝の居場所に求めるもの (N = 192) ※複数回答可



メモ

22時～翌朝までの開所を希望する若者は18時～22時の時間帯の開所を希望する若者に比べて、「一人で安心して過ごせる空間」を求めている若者が多い。また、その他の質問項目では22時～翌朝までの開所を希望する若者は18時～22時の時間帯の開所を希望する若者に比べて「勉強」のサポートというニーズが相対的に低い。

II. 夜の居場所での過ごし方の実際編

次は、①「INDÉPENDANTS for youth」および「同時代セカンドハウス」のユーザーアンケートと②8月～9月期にスタッフが作成したかわり記録を手掛かりとして、実際に「夜のユースセンター」が若者にどのように利用されたのかについて見ていくことにする。

調査概要

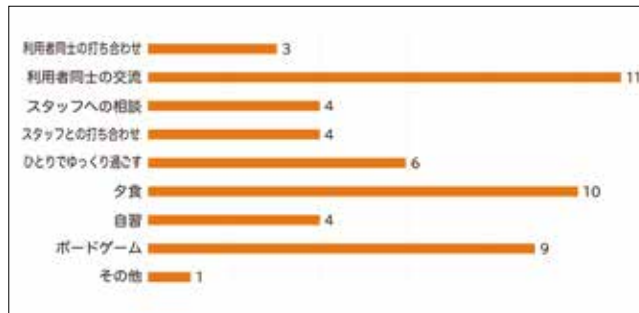
8月～9月期の「INDÉPENDANTS for youth」を利用していた若者と11月以降の「同時代セカンドハウス」を利用していた若者へのアンケート調査を実施した。

夜の居場所での過ごし方

グラフ⑨ 「INDÉPENDANTS for youth」での過ごし方 (N = 88)



グラフ⑩ 「同時代セカンドハウスでの過ごし方 (N = 52)」



メモ

8月～9月期の「INDÉPENDANTS for youth」の現場にて収集されたスタッフによるかかわり記録シートより、かかわりのあり方/場がもつ機能を類型化した。

4つの機能

機能① 駆け込み寺として

具体的な事例

例えば、学校で夜の若者食堂の利用カードを拾って参加してくれた若者の事例や店舗先に置いてあった看板を偶然見かけて参加してくれた若者がいたことがあげられる。その中には、ご飯がまともに食べられていない様子の若者がいたことも共有されている。

機能② 自己肯定感が担保される場として

具体的な事例

例えば、スタッフに「興味のある話を否定されずに話を聞いてくれた。」と言って過ごした若者もいた。自分の描いている絵を見ながら、その描き方を教えてくれた若者もいた。家に帰りたくないと言いながら、利用していた若者がいた。

機能③ 関係性に広がり生まれる場として

具体的な事例

例えば、初めまして同士の若者がボードゲームを通じたかかわりや若者の自主企画への参加を通して新たなつながりをつくっていく姿が見られた。

機能④ ポジティブが累積される場として

具体的な事例

例えば、スタッフとのコミュニケーションを通して「自分たちの夢を応援してくれた!」と感じた若者がいたり(ユーザーアンケートより)、夜のユースセンターで自分のロールモデルとなりうる存在を見つけた若者もいたことが報告されている。「将来のためにいろんな経験を積みたいな。」と言って参加していた若者もいた。

Ⅲ. 若者にとっての「夜のユースセンター」編

以上を踏まえ、ここでは若者にとって「INDÉPENDANTS for youth」と「同時代セカンドハウス」という場が「夜のユースセンター」という事業の一連の流れの中でどのような場として意味づけられているのかをみていくことにする。それぞれの場の雰囲気や彼らの「語り」から感じてもらおう。

調査概要

8月から継続的に「夜のユースセンター」を利用している数名の若者にスタッフが1時間程度のインタビュー調査を行った。

都会的な「INDÉPENDANTS for youth」、
実家感のある「同時代セカンドハウス」

ある若者は「INDÉPENDANTS for youth」は都会的で、「同時代セカンドハウス」は実家感があつたと語った。

「INDÉPENDANTS for youth」はどっちかっていうと、もうちょっと都会的になるのかな。

私の、イメージでは、あんまり、家感というよりはホームパーティーみたいな(笑)。

でも、「同時代セカンドハウス」は実家感がある、感じ。ま、こども中学生の子とか来てましたし、高校生もいて、私よりちょっと年上の人もいて、みたいな感じで、ほんとになんか家感。やったことないですけど(笑)。

なんか、海外のホームパーティーって感じ。

なんか、そこがちょっと違いかなっていう。

Uさん(当時・大学生。)

このように同じ「夜のユースセンター」でも「INDÉPENDANTS for youth」と「同時代セカンドハウス」では異なる場の空気(あるいは、文化)が醸成されており、それらの違いを若者は若者なりに感じ取り、この場を自分の生活の一端として利用するようになる。

「自由」の意味が異なる、それぞれの場

また、違う若者は「INDÉPENDANTS for youth」と「同時代セカンドハウス」とでは時間の流れが異なると語った。

どうも、そうした時間の流れ方の違いはこの若者にとってのそれぞれの場で「自由に過ごす」ということの意味を異なるものにしていったようだ。

なんか、とりえず、「INDÉPENDANTS for youth」は、ちゃんとご飯を全部作ってくれる。

すごい自分で予定を立てやすいけど、こっちはそんなことがないから。あの、ある意味でほんと自由だなんて思いますね、「同時代セカンドハウス」の方が。

あの、「INDÉPENDANTS for youth」は、予定組んでっていうか、その割と時間調整しやすいというか。

自分にご飯が食べたいなって思ったときに、頼めば、それくらいの

時間に用意して下さるじゃないですか。だから、遊びたいときは遊べるし、食べたいときに食べれるし、っていうのを。

すごい自分で時間を操作しやすいというか、時間の使い方っていうのは、すごい、「INDÉPENDANTS for youth」の方が自由かかっておもしろいけど、「同時代セカンドハウス」は、やりたいことを、なんか片っ端からできるようなイメージもあるので。

それこそ、料理に参加したかったら、参加しますって行けるわけだし。抜けたかったら抜けたらいいわけで。

その代わりに、そのご飯が出てくる時間帯とかは、調理している人たちのあれもあるから、あれですけど。

あの・・・なんか、自由、自由に、自由に出来る時間、っていうか、時間の、なんて言ったらいいのかな・・・なんか、すごい、言い方が難しいですけども、同じ言葉でもなんか、違う意味をもつみたいな感じの、状態?

だから、自由な時間っていうけど、向こうは、自由に時間が、調整できるというか、使えるというか、感じですけど。

「同時代セカンドハウス」は、自由に時間が過ぎていく場所かなって感じですかね、なんか、あっちゅう間に11時とかじゃないですか。

言うてるうちに、調理して、食って、片づけたと思ったら11時ですよもうっていう。(笑)。

(聞き手: まあ、「INDÉPENDANTS for youth」って、なんか10時ぐらいから消化試合みたいになるもんね、)

うん。もう、あと1時間か、どうする?みたいな感じから始まるんですけど、こっちはそんなことないんで。

Mさん(当時・大学生)

カフェでひととであうこと、家でひとつつながること

また、違う若者は「INDÉPENDANTS for youth」と「同時代セカンドハウス」では若者同士の関係性のあり方が違うと語った。

そのようなつながりは、若者にとってときに生活を豊かにもするが、ときに窮屈なものとして感じられるものであったようである。

「INDÉPENDANTS for youth」だったら、広い場所でBGMが流れて、グッズがいっぱいあって、ご飯食べて遊ぶ場みたいなだから、親密な話をしない中だから。

人間関係が、めっちゃ、仲は良くなったけど、お互いのことをそんなにめっちゃ知れたかって言ったら、そんなこともなくて。

「同時代セカンドハウス」に移ってからは家みたいなどころに行って、他の若者と2人で一緒にすごい話す時間があるとか。

そういう、すごい仲がめっちゃ良くなった。いい意味で。

家っていう空間で。家っていう空間の中で、仲が、仲良くなるんことが出来たと思う。

それが「同時代セカンドハウスのいい面だった。

一人一人のことを知れてるっていうことで。

でも、ちょっと、「同時代セカンドハウス」では悪い面も出てきて

いたように感じてるんですよ。

行き過ぎた対応をする人が増えてきてしまったっていうのが。

なんか、「同時代セカンドハウス」は、家であり、公共の福祉を守らなければならない空間っていうのが、ちょっと、もうちょっと、みんな考えた方がいいんじゃないか?って思いながら生きてます。相反してることを言ってるけど(笑)。

Kさん(当時・大学生)

おわりに

～サードプレイスとしての「夜のユースセンター」とは

最後に、私たちが実践した「夜のユースセンター」が若者にとってどんな場であったのかという点に関して少なくとも示唆をくれる若者の語りを紹介して、この調査・研究のページの結びとしたい。

なんか、もう、利用している若者みんなが個性的過ぎて、多様、多様性しか浮かばない。

でも、なんかそれを、なんか、閉じ込めずに、発揮しているのは、この場のいいところかなって思ってる、し。

また、その学校とは違うなっていう感じ。

学校はなんか、みんな一緒にとか、なんか、みんなで揃えてみたの多いけど、やっぱりそこは違ってた自分のやりたいこととか、自分の気持ちを発信できる場所なんじゃないかなって思うから。

ほんとに、第3の、場所、みたいな感じ、イメージですね。

Dさん(当時・大学生)

この若者が「夜のユースセンター」という場の象徴する言葉として取り上げた「多様性」というキーワードを2番目の若者が迷いながらも発した「自由」というキーワードや3番目の若者が苦笑いで応えた家という場とは相反するらしい「公共」というキーワードとも関連させて捉えてみよう。

すると、私たちが実践した「夜のユースセンター」が若者にとってのサードプレイスとなっていたとするなら、そこで「多様性」が担保されており、そこに「自由」と呼ばれる状態があり、その上で、そこが「公共の場」としての機能を持っている場合においてだったことが示唆される。

※本調査の設計や全数調査の作成および分析、かかわり記録シートの作成・分析につきましてYofukashi*のみなさま(京都府立大学・朝田佳尚さん、京都橘大学・石山裕菜さん、京都府立医科大学・前田絢子さん、京都医健専門学校・宮江真矢さん)に多大なるご尽力賜りましたことをここに付記します。

夜のユースセンターで生まれたもの

中間報告会

(共催：一般社団法人 京都わかさねっと)

日時：2021年11月14日(日)
14時～16時

方法：オンライン

参加人数：16名

事業報告会

(共催：一般社団法人 京都わかさねっと)

日時：2022年3月15日(火)
18時～20時

参加人数：53名(関係者含む)

「夜のユースセンター」と同時期にオープンした「わかさリビング」(運営：一般社団法人 京都わかさねっと)と共同し、報告会を開催した(全2回)。

11月の中間報告会は、オンライン開催とし、「同時代セカンドハウス」と「わかさリビング」の2拠点から接続する形式で実施。立ち上げに至る背景や事業構想の紹介、活動報告の他、今後の展開を議論した。当日は利用している若者も同席し、コメントを求める場面もあった。

3月の事業報告会は『若者と一緒につくる場の可能性』と題し、「夜のユースセンター」「わかさリビング」による事業報告、話題提供、トークセッションの3部構成で進行。富山県高岡市で『コミュニティハウスひとのま』を運営する宮田隼氏をゲストに招き、オープンアクセスの場づくりについて話題提供をいただいた。

トークセッションでは、モデレーターにまちとしごと総合研究所・三木俊和氏を招き、「コミュニティハウスひとのま」「夜のユースセンター」「わかさリビング」3者で、場づくりにおける限界や課題、今後の可能性について議論した。

報告会終了後は「夜のユースセンター」をオープンし、若者・参加者が同じ時間を過ごした。

ワークショップ「かたちののこしかた」

日時：2022年3月8日(火)
20時～21時30分

場所：同時代ギャラリー GARAGE
(京都市南区東九条北松ノ木町7-1)

利用者数：6名

アーティスト吾郷佳奈氏とのコラボ企画として、ワークショップ「かたちののこしかた」を開催した。

吾郷氏は同時代ギャラリーで個展開催実績のある作家である。

参加する若者にはお弁当を配布し、ワークショップをメインとした、通常の「夜のユースセンター」とは異なる形式での開催となった。

大判の色用紙に寝転がり、自分たちの形を線でなぞっていく。形に沿ってハサミで切り抜き、「わたしかたち」をギャラリーに掲示した。

わたしたちのかたちののこしかた 夜のユースセンターお披露目会

日時：2022年3月26日(土)
3月27日(日)
13時～17時

場所：同時代ギャラリー GARAGE
(京都市南区東九条北松ノ木町7-1)

利用者数：9名

最後の企画として、「夜のユースセンター」の軌跡をたどる展示会を開催。

『わたしたちのかたちののこしかた 夜のユースセンターお披露目会』と題し、INDÉPENDANTS・同時代セカンドハウスの様子を写した写真の他、アーティスト吾郷氏と共に制作した作品や若者の自主企画で制作した作品を展示した。

同時代セカンドハウスでの過ごし方を再現するため炬燵やボードゲーム等も設置し、若者たちが過ごした時間を追体験できる場となった。

開催にあたりアイデアやコメントを募ったり、DM制作を依頼したりと、若者の参画が大きな力となった。



夜のユースセンターを運営すること

決算書

科目名	予算案	現状	備考
事務局人件費	¥942,000	¥1,113,375	
現場人件費	¥1,761,000	¥1,543,148	※深夜手当含む。
賃借料	¥1,180,000	¥1,170,100	
消耗品費	¥190,000	¥310,871	
印刷製本費	¥130,000	¥31,260	
諸謝金	¥200,000	¥363,979	※デザイナーや研究協力者ほかへの謝金。
光熱水費	¥50,000	¥0	※賃借料に含まれているため。
器具備品費	¥250,000	¥182,078	
若者助成金	¥140,000	¥60,000	※若者限定のフードチケットを配布。
保険料	¥24,000	¥12,100	
その他			
合計	¥4,867,000	¥4,786,911	

事務局担当者所感

夜のユースセンターは令和4年3月で一旦区切りとなるが、今回見えた課題や展望についていくつか述べたい。

まずは決算状況についてだが、おおよそ予算通りの執行となった。

しかし当初の想定より利用者の個別対応にかかる時間が多く、現場人件費は想定と異なる結果となった(金額で見れば予算額を下回っているが、これは新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、夜のユースセンター実施を見送った期間があったためである)。

同時に労務管理の面からも課題が見られた。

時間の決まりきったプログラムだけではなく前述のような対応によって、深夜や早朝にスタッフが稼働する機会も多くなり、本来業務に影響がでる懸念もあった。常に管理者がいる状況をつくることも難しく、今後こういった場づくりを続けていくためには、柔軟な働き方を認め、そこを支え合い理解し合う組織風土が必要だと感じている。

また、今回の運営については京都市ユースサービス協会職員だけでは困難であった。

ボランティアや業務委託等様々な形で関わっていただいたスタッフには心から感謝するとともに、こういった場に関わり続けたい思いをどう汲み取り、機会を生み出すかは改めて考えたい点である。

最後になるが、今回の夜のユースセンターは単年度の助成金を活用しての実施だったため、現時点では継続の見通しは立っていない。

若者や地域からのニーズは大きい取り組みであると理解しているため、費用確保を含めた課題をクリアにしていき、助成金だけに頼らない持続可能な仕組みとともに再スタートを切ることができればと考えている。

現場スタッフの声

「邪魔もしないし、無視もしない。」
これが、私の目から見た夜のユースセンターや、そこにいる若者たちの姿の印象です。

INDÉPENDANTS for youth の開始当初は青少年活動センターの既存ユーザーたちの利用から始まりましたが、口コミやSNSを頼りに訪れる若者が徐々に増え、元々仲間同士のグループや個人ベースで関わっていたスタッフも段階的に関わり方を変えていきました。

仲間ではないけど、ただの他人というほど無関係ではない、そんな若者同士の接触の場面は独特の緊張感がありながらも、会う回数を重ねていくうちに、スタッフを介さなくても一緒にゲームやおしゃべりが生まれる空気感ができていきました。

全員が一つのボードゲームに参加してちょっと窮屈そうな時期もありましたが、参加者が増えていく中で、ゲームで盛り上がるテーブルや、その輪の中には入らないけどその空気感を共有している人、受付係のスタッフとまったりお話しをする人、自習してる人の近くで別の人がパソコン作業を始め、いつの間にか自習コーナーが自然発生したりと、ひとつの空間の中に、多様な過ごし方が絶妙に共存している場になっていきました。

それは、11月から始まったセカンドハウスでの開催においても同様で、冒頭の言葉のように、それぞれの過ごし方が当たり前前に保証され、また、保証しあう空間が、かれらが実践の中からとり着いた、心地よい居場所の条件だったのではないかと感じています。

スタッフ ぜき

おわりに

事業担当としては巻末をかざる“おわりに”において、声高にできた!と言いたいのであるが、課題が多く見えた事業であったと振り返って思う。

特に、“すべて”の若者を対象とする私たちは、本当に“すべて”の若者を対象とすることができるのか、限界性の実感、若者が他者との葛藤の中で成長する、という私たちの理念、そこに内在する暴力への応答、公共施設・地理的・時間的限界を超えるために生み出した本事業が再生産する排除、支援を主としない私たちに突き付けられる制度の狭間に居る若者への支援、及びそれを求める支援機関への対応と支援を求める若者とのミスマッチ、本事業を遂行するにあたっての組織労務的・経営的課題、など枚挙に暇がない。

ベースにしていた理念や正義が揺らぎ、事業の中止が頭によぎったことも一度や二度ではない。自分が、場所を通じて加害行為を働いているのではないか、と思ったこともある。

しかしながら、事業を運営し通せたこと、私がこれらの課題を宿題として捉え、次に向かってるのは、若者が場所に対して愛着を持ち、通い続けてくれたことに他ならない。

私が若者に言った、「なにがあってもこの場所はあなたを拒むことはない。」という言葉は、若者から私に響いている。

さて、「～for youth」、「～セカンドハウス」にはそれぞれ、私の野望が含まれている。今回はカフェでの実施だが、ライブハウスやショッピングモールなど、本来別の目的がある場所において、若者のための機能を展開する「～for youth」、衣食住の機能を持つ場「～セカンドハウス」。

私たちの活動だけでは到底“すべて”の若者を網羅することが出来ない。だからこそ、私たちがタクトを持ち、今はバンドかもしれないこの動きを、オーケストラにしていく、そんな動きが今後必要不可欠だと、くしくも上記の問題意識から、なお一層強く実感している。

本事業はアクションリサーチとしても位置付け、“現場感覚”でしかなかった現状を、言語化し、社会に向けて発信してことも目標の一つとしている。

上述の課題への応答は本報告書段階では、未だ十分になしえていないが、このながれをブームで終わらさないためにも、その一助に本報告書が寄与すれば幸いである。

最後に、同僚や部下、上司、近似領域の個人・同業者、事業へ共感いただいた異業種の個人・事業者、そして現場運営を担うスタッフなど、似た思いを持つ仲間が存在も私には大きな存在であった。そして、なによりこの場で出逢った若者全員に改めて、感謝申し上げたい。

夜のユースセンターでまた会える日を誓って。

2022年3月31日
公益財団法人京都市ユースサービス協会
チーフユースワーカー 大下宗幸



関係機関一覧

赤い羽根共同募金 | 公益財団法人パブリックリソース財団 | 特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば |
特定非営利活動法人こどもソーシャルワークセンター | 特定非営利活動法人 happiness |
特定非営利活動法人コミュニティ・スペース sacula | 一般社団法人京都わかかさねっと

協力 認定特定非営利活動法人セカンドハーベスト京都

発行日：令和4年3月31日

本事業は赤い羽根 新型コロナ感染下の福祉活動応援全国キャンペーン「居場所を失った人への緊急活動応援助成金」とパブリックリソース財団「コロナ寄付プロジェクト」による助成で実施されたものです。

夜のユースセンター

同時代セカンドハウス